

【来賓挨拶】 山口寿一・読売新聞グループ本社代表取締役社長

こんばんは。読売の山口でございます。

一般財団法人スポーツエコシステム推進協議会の設立、おめでとうございます。この協議会の設立は、誠に時宜を得たものであると感じております。

この協議会には100社を超える会員企業が参加をされています。スポーツと企業の関係で思い浮かぶのは、駅伝の始まりです。日本で初めて駅伝競走が行われたのは大正6年、今から100年以上前のことです。大正6年は、江戸が東京になってちょうど50年目で、当時の東京市が「東京奠都50年奉祝博覧会」という大きな催しを上野で開きまして、このときに東京のさまざまな企業が博覧会を盛り上げようと、競い合って協賛事業を企画しました。そんな中で、ある会社が企画したのが「東海道五十三次駅伝競走」という破天荒なスポーツイベントでした。

京都の三条大橋を出発点に、ゴールは東京上野の博覧会場。この間500キロ以上。東海道53の宿場のうち、大体半分を中継所にして、関東組と関西組の2つのチームのランナーが、昼も夜も休まず3日間走り継いで、上野のゴールを目指すという前代未聞の競争で、これを駅伝と名づけました。タスキもこのときに登場しました。

コース中、最大の難所は箱根の山越えで、京都を出発して2日目の真夜中に山登りとなりました。この駅伝競走で関東組の最終走者を務めたのが、金栗四三さんでした。これがきっかけで、この3年後に箱根駅伝が生まれたということは御存じの方もいらっしゃるかもしれませんが。

ところで、東海道五十三次駅伝を企画した会社が、読売新聞社でありました。イベントとしては大成功でしたけれども、予想をはるかに超えるお金がかかってしまい、新聞の販売促進にはほとんどつながらなかったと、読売の社史に書いてありました。でも、箱根駅伝は今年のお正月に100回大会を迎えます。おかげさまで読売はずっとお手伝いをすることができましたので、とてもよかったと、ありがたく思っているところでございます。

申し上げたかったのは、企業がアイデアを出して、駅伝という新しいスポーツイベントが生み出されたということです。企業のアイデアがスポーツを活性化させました。この構図は、今も変わらないのではないかと思います。スポーツが持つ純粹さ、健全さを大切に。ここは絶対に脅かしたくないわけですね。データの時代とはいっても、安易にスポーツベッティングに走ることなく、スポーツくじの活用などを考えながら、スポーツを成長させていきたいわけです。それには、民間企業の高い倫理感と、優れた企画力が必要になります。

それからもう一つ、日本だけでなく、成熟した先進国はどこもそうですが、オリンピックのような大きな国際大会を開こうとすると、世論が分かれるという事態が起きがちです。このような状況を意識して、最近、ヨーロッパでは、大きな国際スポーツ大会を開く際には、大規模なアリーナ、スタジアムのような有形のレガシーではなくて、社会貢献、社会変革といった無形のレガシーをつくることを重視し、それによって世論の理解を得ていこうとい

う考え方が出てきています。

例えば、来年オリンピックを開くパリでは、大会の開催を通じて、貧困層の雇用創出やSDGs、資源のリサイクル、リユースの促進を進めることにしています。こうした社会課題の解決を託されるのは、オリンピックを協賛する民間企業になります。ここでも企業の積極的な関与が期待されています。

この協議会には、たくさんの企業が参加をされています。多様な企業がアイデアを出し合い、スポーツに積極的に関与していただいて、日本のスポーツのエコシステムを推進させていくということを心より願っております。